

むかし。

あるところに、とつとあとかかがいました。貧乏で貧乏でどうしようもないので、あるとき、とつとあが、

「おらとこは、どうしてこう貧乏なんだろ」といいました。かかは、

「きつと、貧乏神がついてるから、いつまでたっても貧乏なんだ」といいました。

「そんなら、貧乏神が寝^ねているひまに、北海道かどこか、遠いところへ逃^にげて行かないか」「うん、そうしよう」

とつとあとかかは、こつそりしたくをして、夜逃げをしました。

朝になって、大川^{おおかわ}の渡し船^{わた}に乗って、向こう岸に渡りました。ふたりは、

「やれやれ、大川の渡しを越^こして、これでやつとほつとしたねえ。貧乏神はもうここまでは来ないよ」といい合いました。

ところが、ふと見ると、そこにちゃんと貧乏神が待^まっていて、

「おう、おまえたち、来たか。おら、ずっと早くに来て夜じゅう待ってたんだぞ」といいました。そして、とつとあ^{せなか}の背中^{はな}にびよんとどびつきました。

貧乏神はどこへ行っても離^{はな}れないと、昔からいわれているそうです。

これで、いちやポンとさけた

村上郁再話

資料『とんと一つあったてんがな』水沢謙一／未来社